

丹後の迎賓館

伊野近富

はじめに

延長7年(929)12月23日、丹後国が朝廷に言うには、丹後国竹野郡大津浜に1隻の船が到着した。この船には93人が乗っており、そのうちの1人が渤海国の入朝使であった文籍太夫^{はいきゅう}斐^{はい}と名乗ったことから、当初丹後国は正式な渤海使が来着したと考えていたようである。

しかし、その後朝廷から派遣された存問使が詳細を問うたところ、事の子細が合わないことから、再度問うたところ、実は渤海国は東丹国に滅ぼされたため、今回は東丹国使としてやってきたというのである。数ヶ月の滞在の間に、日本国としては国使としては認めず、平安京に入京させないことを決め、丹後国から東丹国へ戻された。

この間、丹後国のどこかに彼らは処遇が決まるまで逗留されたのであるが、その場所は不詳であった。本稿は、現京丹後市網野町横枕遺跡こそが、この滞在場所であったと論証するものである。

1. 横枕遺跡の調査成果

横枕遺跡は、京丹後市網野町横枕に所在する。平成3年度に道路改良工事に伴って財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した結果、奈良時代から平安時代にかけての遺跡であることが明らかとなった。^(注1)

地理的環境を述べると、横枕遺跡は丹後の海岸に近い丘陵端とその両側にある谷部に位置している。北方約2kmには日本海があり、その手前には潟湖である離れ湖を望むことができる。現在、離れ湖は大きく干拓されているが、低地の範囲を見ると、かつては遺跡の300m近くまで湖であったと考えられる。

発掘調査により、奈良時代後期から平安時代前期(8世紀後半～9世紀中ごろ)と、平安時代前期から中期はじめ(9世紀中ごろから10世紀後半)の遺跡であることが判明した。遺構は谷部に設置した第1トレンチの西側部分で柱穴群を、丘陵上に設定した第2トレンチで作業場と考えられる竪穴状遺構と、それに伴う井戸と土坑、鍛冶関連土坑を確認した。

出土遺物は多種多様で、整理箱で57箱分出土した。奈良・平安時代に属するものとし



図 関係遺跡位置図

ては土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・中国製白磁・青磁・帯金具・土錘・るつぼ・鍛冶滓がある。また、時期は不明だが基石も出土している。また、直径30cmもある立派な柱も出土した。

さらに、網野町教育委員会(現京丹後市教育委員会)による第1次調査^(注2)では土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製青磁・無釉陶器・黒色土器、風字硯・砥石などが出土している。

遺構に伴うものはほとんどなく、良好な遺物が出土したのは谷部である。松尾史子の検討によれば、谷部の埋め土からの出土遺物は3時期に分けられる。まず、下層が8世紀後半から9世紀中ごろ、中層が9世紀中ごろ以降、上層が12～13世紀とされている。

本稿で注目するのは下層と中層である。下層出土遺物の主体は回転台成形の土師器杯である。①都城の土師器を模倣したもの、②平底で体部が湾曲して斜め上方に立ち上がるもの、の2種がある。後者はヘラ切りである。

須恵器には杯Bと杯蓋がある。京都産の緑釉陶器が伴出する。墨書土器はこの時期に伴うものである。「山田」が2点、「山□」が1点、「ク」「菓」などがある。「山田」は人名か地名であろう。人名ならば延暦23年(804)7月に出発した遣唐使の録事に山田大庭がいる。彼は、翌年6月に日本へ戻った(『日本後紀』)。また、大同元年(806)1月28日条には、外徒

五位下山田造大庭が丹後介に任じられている(『日本後紀』)。外従五位下という位や丹後介という役職から考えると、もともと丹後の豪族であった可能性が高い。丹後国與謝郡には山田郷(現与謝野町)^(注3)があり、ここを基盤とした人物であったかもしれない。とすれば、もし、その人物が横枕遺跡にあった施設に来た際に容器に書かれたとすれば、墨書の「山田」は人名であり地名でもあることになる。

中国製青磁は越州窯製品である。森田編年のI-2類に相当し、8~9世紀のものである。貴重であったらしく、破損した箇所を漆を塗り、補修している。白磁は5点出土している。報告では邢窯系か定窯系(中国河北省曲陽県定窯)のものとした。今回、詳細に実見したところ、通常の定窯系よりも分厚く、また、釉に黒点が混じり、泡が見えるので、近年発見された北京市竜泉務窯のような倣定窯製品^(注5)であるかもしれない。この製品は亀井明德氏によれば、渤海国があった遼東地域でも多数出土している。第1次調査で出土した黒色土器の風字硯も平安京以外での出土は極めて珍しい。帯金具は銅製黒漆塗りの巡方である。これは、六位以下および無位の官人が使用するもので、9世紀初期に着用は停止された。これらは、8世紀後半から9世紀中ごろである。

次の遺物のピークは9世紀後半から10世紀前半である。緑釉陶器が多量に出土したが、ほとんど京都系で、一部近江系がある。灰釉陶器もある。なお、無釉陶器も出土している。平安京以外で出土するのはきわめて異例である。

以上、これらの製品は都城を頂点とした官衙施設で出土するものである。特に緑釉陶器が120点以上出土しているのは、京都北部ではここだけである。宮津市中野遺跡でも多量に出土するが、そこは国分寺があった場所で、中世にも雪舟が描いた天橋立図に描かれているように、丹後の中心地であったので、この場合は当然といえよう。

さて、このように丹後でも有数の官衙施設であった横枕遺跡は、いったい何のために設置されたのであろう。

2. 考古学からみた横枕遺跡

横枕遺跡で官人が使用する帯金具が出土したことは、ここが公的施設であったことを示している。ここで、横枕遺跡の立地を考えてみよう。平安京から見てみると横枕遺跡は山陰道の近辺にある。山陰道は丹波国から但馬国へ続き、山陰方面へ向かうので、丹後国へは支路があったと考えられる。支路は福知山市から与謝野町の加悦谷に入り、国府があったと想定される宮津市へ向かうが、途中から竹野川流域に行けば、横枕遺跡に近づく。なお、丹後国は和銅6年(713)に丹波国の「加佐、與謝、丹波、竹野、熊野」の5郡によって成立したのである。丹波郡は京丹後市峰山町丹波を中心にした地であった。しかし、分国

する頃には丹波国の中心は亀岡市や南丹市八木町などの地域となっていたようである。ともあれ、丹波郡は古代の中心地であったことから、道も整備されていたと考えられる。横枕遺跡の東約2kmのところには、古墳時代後期からの製鉄遺跡があり、奈良時代には出土した木簡の内容から公的な生産地であったらしい(遠處遺跡)^(注6)。

松本氏の集成によれば、丹後地域では12箇所で円面硯が確認されている^(注7)。硯が出土することは古代で文字を書く施設であったことを示しており、古代の役所や寺院があったことを示している。熊野郡2例、竹野郡^{たかの}5例、與謝郡4例、加佐郡1例である。竹野郡に属する横枕遺跡でも出土している。古代の役所や寺院の存在を示す墨書土器も熊野郡1例、竹野郡5例、丹波郡7例、加佐郡2例で出土している。

竹野郡は現在京丹後市であるが、西に網野町、東に丹後町その南に弥栄町という3地域に分かれる。川は網野町に福田川があり、河口には八丁浜(1km弱)という竹野郡最長の砂浜があり、離れ湖という潟湖がある。丹後町と弥栄町に竹野川があり、河口には300mほどの砂浜と竹野遺跡のうしろには潟湖がある。なお、福田川河口から3kmほど遡ると浅後谷南遺跡があり、包含層などから判読できない墨書土器数点と墓から平安時代初期の八稜鏡と跨帯が出土している。古墳時代初頭には水辺の祭祀遺跡であり、奈良・平安時代にも祭祀的な意味合いが強い。横枕遺跡が住居域あるいは政務場所とすれば一対を成すのかもしれない。

3. 丹後国に漂着した記事

丹後地域は日本海に面しており、古代から大陸とのつながりが深いところであった。文献資料を紐解くと、9～10世紀には3件の記事が注目される。

丹後国竹野郡に、貞観5年(863)11月17日に舟が漂着した。

史料1

先是、丹後国言、細羅国人五十四人來着竹野郡松原村、問其來由、言語不通、文書無解、其長頭屎鳥舍漢書答云、新羅東方別島、細羅国人也、自外更無詞、因幡国言、新羅人五十七人、來着荒坂浜頭、略似商人、是日、勅給程糧、放却本蕃

この文は、丹後国と因幡国とに細羅国人と新羅人とが漂着したことを伝えている。まず、丹後国が朝廷に言うには、細羅国人54人が竹野郡松原村に來着した。來た理由を質問したところ、言葉が通じなかった。そこで、(おそらく漢字で書いた)文書を見せたけれど、理解されなかった。しかし、その長頭(首領)屎鳥舍(あるいは首領である頭屎鳥舍)が漢字を書き、新羅東方の島にある細羅国人也と答えたが、その後言葉はなかった。おそらく、あらかじめ用意していた文書を見せただけであったのだろう。会話まではできなかったの

である。ここにある松原村は現在不明である。

一方、因幡国が言うには新羅人 57 人が荒坂浜のほとりに来着した。商人と思われる。この日、勅が下され食料を給して、元の国に還したのである。

ここで、8 世紀末から 9 世紀にかけての対外政策をみてみよう。山内晋次氏の研究^(注 8)によれば、宝亀 5 年(774)の官符によって「流来」「帰化」の処置を明確に区別し、「流来」者の送還を義務化している。漂流民が来着した場合は、まず、現地の国司が彼らを保護し、中央政府に報告する。西海道諸国は大宰府経由で言上する。この間、漂流民はしかるべき場所に移し置かれ、食料が支給される。中央政府の許可が下りれば送還することとなっていた。

元慶 3 年(879)に、丹後に異国船が漂着した。

史料 2

丹後国言、異国船一艘、長六丈、広一丈五尺、漂着管竹野郡、皆悉破損、無有調度
(『日本三代実録』元慶 3 年 3 月 13 日条)

丹後国司が言上した。異国船一艘、長六丈(約 18 m)、広一丈五尺(約 4.5 m)のやや大きな船であった。おそらく、数十人は乗船できたと思われる。しかし、遭難したらしく、丹後国竹野郡に漂着したものの、悉く破損しており、また、調度品もなかった。

上記の 2 つの史料はいずれも竹野郡に漂着している。丹後半島の中でもっとも安全な着岸地であった証拠であろう。この点から、八丁浜と離れ湖の存在は注目できる。

4. 横枕遺跡の画期

さて、横枕遺跡の出土遺物で、都城で出土する遺物と共通するものがもっとも多い時期

付表 漂着関係年表

西暦	和 暦	出 来 事
799	延暦 18	渤海使の来朝の年限(6 年 1 貢)をなくしたことを諸国に伝える
800	延暦 19	蕃客の来朝に備え、破損した駅家を修理させる
804	延暦 23	渤海使が能登国に来着することが多いので、客院を作らせる
809	大同 4	渤海使到着
810	弘仁元	渤海使到着(越前国か)
814	弘仁 5	渤海使到着(出雲国)
817	弘仁 8	渤海使到着
819	弘仁 10	渤海使到着
821	弘仁 12	渤海使到着
823	弘仁 14	渤海使到着(加賀国)
825	天長 2	渤海使到着(隠岐国)
827	天長 4	渤海使到着(但馬国)
841	承和 8	渤海使到着(長門国)
848	嘉祥元	渤海使到着(能登国)
859	貞観元	渤海使到着(能登国)
861	貞観 3	渤海使到着(隠岐国)
863	貞観 5	細羅国人到着(丹後国)
871	貞観 13	渤海使到着(加賀国)
876	貞観 18	渤海使到着(出雲国)
882	元慶 6	渤海使到着(加賀国)
892	寛平 4	渤海使到着(出羽国)
894	寛平 6	渤海使到着(伯耆国)
908	延喜 8	渤海使到着(伯耆国)
919	延喜 19	渤海使到着(越前国)
926	延長 4	渤海国、契丹に攻められ滅ぶ
929	延長 7	東丹国使到着(丹後国)

は10世紀前半である。緑釉陶器は亀岡市篠窯産が主体である。これは、平安京でも多量に出土するもので、都の土器の代表格である。さらに、須恵器碗は篠窯産を模倣したものである。胎土は砂粒を多く含むことから、精良な篠窯製品とは相違する。おそらく、京丹後市峰山町名地谷窯産である可能性が高い。この窯は突然出現するもので、10世紀前半の特別な事情により、都の土器を模倣する必要が生じたといえよう。この他、越州窯青磁、日本の灰釉陶器などがあるが、特筆すべきは中国製白磁の存在である。これは、遼東半島で多く出土する倣定窯系なのであり、上述のように平安京を頂点とした都市型の土器様相を示している中で渤海国の影響を示唆しているのである。

この状況に対応する歴史事実が次の史料にある。

史料3

渤海入朝使文籍太夫斐璆、着丹後国竹野郡大津浜
(『日本紀略』延長7年(929)12月24日条)

史料4

丹後国言上、渤海客到来由、左大臣参、被定召否之由、件客九十三人、去年十二月二十三日、着丹後国竹野郡
(『扶桑略記』裏書延長8年正月3日条)

史料5

唐客称東丹国使、着丹後国、令問子細、件使答状前後相違、重令復問東丹使人等、本雖為渤海人、今降為東丹之臣、而対答中、多称契丹王之罪惡云々、一日為人臣者、豈其如此乎、須拳此旨、先令責問、令須令進過状、仰下丹後国已了、東丹国失礼儀
(『扶桑略記』裏書延長8年4月朔日条)

これらの記事は、渤海大使斐璆が丹後国竹野郡大津浜に漂着したことを告げている。

この直前に渤海使が来たのは大使斐頰はいていが元慶6年(882)、その子斐璆はいきゅうが延喜19年(919)であった。これに対応したのが前者が菅原道真、後者がその子淳茂であった。斐璆は延喜8年(908)にも来日している。延長7年は十年ぶりの来日であり、朝廷も本格的に使節を接待することを考えていたようである。そこで、通常通り存問使を派遣した。前回、来日時の詩宴で斐璆と知己になっていた藤原雅量を丹後国へ派遣したのであろう。ところが、その結果、上田雄氏によれば(注9)、「斐璆は旧知の雅量と出会って気を許したのであろう。渤海国滅亡の状況」などを話したのである。この結果、史料5にあるように、大使が答えた前後が異なることになり、意状を朝廷に提出することになるのである。その意状に対する朝廷の裁定である過状が、『本朝文粹』に収められている。これによれば、滅ぼされた渤海国の臣であったにもかかわらず、東丹国に仕えた不忠不義を厳しく叱責している。藤原雅

量は、立場上斐璆と打ち解けられず、彼が放還された後、漢詩を作っている。

史料6

遼東丹斐大使公、去春述懐見寄於余勘問之間遂無知之、此夏綴言志之詩、披興得意之人、不耐握玩偷押本領

詩の詞書きには、遼東の斐大使がこの春わたしに詩を贈ってくれた。しかし、わたしは立場上勘問の間に、この詩に和すことはできなかった。この夏、斐大使が本国へ還った後、漢詩が得意な人のために、詩を作ったが、その交換はできなかったことを嘆いている。2つの詩のうち、後の詩を以下に記す。

史料7

重ねて東丹斐大使公館言志の詩に賦す

凌雲の逸韻いついんは義精微ぎせいなり

一たび詠ずればた任え難くして万感依る

奈いかにともせず不東丹の新使の到れるを

唯憐れむ渤海の旧臣の帰することを

江亭日落ちて孤烟薄く

山館人稀にして暮雨飛ぶ

見まみえて説いう妻児皆散去するを

何れの郷くににか猶し買臣の衣を曳くや

これは、初めの詩につづき、斐大使が公館で歌った詩に、応じて詠ったものである。外国の使節は客館に宿泊させるのが多かった。国府ではないのである。公館と表現したのは名もなき公的施設であったことを示唆している。詩の前半は斐璆が優れた人物であったが渤海の旧臣であったのに、東丹の新使になったため、義のない人になったことを嘆いている。中盤は湖もしくは川に面した建物のあたりは日暮れとなり、一筋の煙が細々とたなびくうらぶれた風景を詠んでいる。山にある館は訪れる人もまばらでただ、雨が降り注ぐのみであるという。終盤はそこで、斐璆から旧知の雅量が聞いたのは、渤海国が滅亡し妻や児らとその混乱により離れ離れになったことであった。そして、「買臣の衣を曳く」とは、はからずも、渤海を滅ぼした東丹国の使節として来訪した斐璆に立場上優しい言葉もかけられず、ただ衣をかけたただけであったと詠んでいる。この衣を懸けるというのは、かつて、菅原道真が斐璆の父である斐頌との別れを惜しんで自分の衣を懸けたという故事によるのである。これは、道真と斐頌、それぞれの子である淳茂と斐璆との交歓を目の当たりにした雅量であったため、とっさにできたことだったのだろう。

おわりに

わたしには、史料7の漢詩の中盤に表現された「江亭日落ちて孤烟薄く山館人稀にして暮雨飛ぶ」という風景が、横枕遺跡の周辺の風景と重なるのである。川、湖、山という景観は竹野郡で滞在させられたのであれば、福田川、離れ湖、丘陵という景観と合致する。漂着の記事にある大津浜という地名は現在どこであったのかは不明であるが、大きな津があった浜というのは、この地点を示している可能性が高い。なお、竹野郡で同様な景観があるのは、竹野遺跡周辺である。ここには遺跡が所在する砂堆と竹野川と現在はないが、広い湖があった。しかし、多くの調査が行われたにもかかわらず、10世紀の中国陶磁器や多くの緑釉陶器は出土していない。横枕遺跡の遺物の特徴は都市型であることである。さらに、平安京では邢窯系か定窯系である白磁が、横枕遺跡では遼東半島で多く出土する倣定窯系なのであり、上述のように平安京を頂点とした都市型の土器様相を示している中で渤海国の影響を示唆しているのである。

結論は、横枕遺跡は公的施設の1つであったが、10世紀前半に丹後国竹野郡大津浜に漂着した斐瑯らを滞在させた公館であったということである。朝廷は初め正式な使節として考えたことから、丹後国に命じて都風の須恵器を作らせたり、篠の緑釉陶器を多量に搬入したのである。使節を供応するため近隣の丹波国も朝廷に命じられ、援助したのは当然であったのである。時期的にいえば、篠の緑釉陶器生産の画期に合致するが、それは本稿の趣旨と離れるので、ここでひとまず筆をおきたい。

(いの・ちかとみ=当調査研究センター調査第2課次席総括調査員)

- 注1 松尾史子・伊野近富「横枕遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1998
- 注2 第1次調査については金木泰憲氏から教示を得た。遺物概要は(注1)文献所収
- 注3 金田章裕「第四章第二節丹後の国府・駅路・条里」(『宮津市史』通史編 上巻 宮津市役所)2002
- 注4 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4)1978
- 注5 亀井明德「遼・金代土城出土の陶磁器の組成」(『アジア遊学 特集北東アジアの中世考古学』107 勉誠出版)2008
- 注6 増田孝彦・岡崎研一・柴暁彦ほか『遠處遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1997
- 注7 松本達也「第5章まとめ 第1節 京都府北部出土の円面硯」(『京都府舞鶴市 平成19年度田畔遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会)2008
- 注8 山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館 2003
- 注9 上田雄『渤海使の研究』明石書店 2002